トロイカ物語

A&B・ストルガツキイ

深見弾・訳

訳者　深見　弾

1936年岐阜県生まれ。1958年早稲田大学文学部卒業。主要訳書、ストルガツキイ『世界終末十億年前』『月曜日は土曜日に始まる』（以上群像社）『ストーカー』『蟻塚の中のかぶと虫』、スタニスワフ・レム『宇宙飛行士ピルクス物語』（以上早川書房）、他多数。

СКАЗКА О ТРОЙКЕ
Аркадий Стругацкий (Arkadii Strugatskii)
Борис Стругацкий (Boris Strugatskii)

トロイカ物語

一九九〇年三月三十日　初版発行©

著者　A&B・ストルガツキイ
訳者　深見　弾
発行者　浅川彰三
発行所　株式会社　群像社
〒101
東京都千代田区猿楽町二―三―一
振替　東京四―九五九四三
電話　（〇三）二九一―六一五三
印刷・製本　岩城印刷株式会社
電話　（〇三）九六一―三四七三

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

ISBN 4-905821-35-5 C0097

トロイカ物語

アルカージイ&ボリス・ストルガツキイ　深見弾・訳

カバー装画／桂川　寛

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

トロイカ物語（『月曜日は土曜日に始まる』第四話）　7
トロイカ物語（一九八七年版）　179
訳者あとがき　438

トロイカ物語

（『月曜日は土曜日に始まる』第四話――一九六八年――）

目次

第一章……11
第二章　物件第四十二号――エーデルワイス老人……30
第三章　雑件……58
第四章　物件第七十二号――異星人、コンスタンチン……81
第五章　物件第十五号と巡回会議……125
第六章　エピローグ……166

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

話はこうして始った――あれはいつだったか、とにかく目が回るほど忙しい思いをしているときのことだった。キテジグラードの魔技術工場宛てのクレームを書き上げるのに四苦八苦しているときに、エジク・アンペリャーンが現れたのがそもそもことの始まりだった。とはいっても、彼は礼儀をわきまえた教養人だったから、いきなり来客用のびっこの椅子に実体化するような不作法な現れ方はしなかったし、無遠慮に壁を突き抜けて部屋へ押し入ってきたり、パチンコで発射した石ころみたいに開け放ってある換気窓から飛びこんでくるようなことはなかった。ぼくの同僚たちは、なにかといえばばたばたと走り回るくせに、時間に遅れたり、予定に間に合わなかったりする手合いが多い。だから不作法もいいところで、いきなり出現したり、飛びこんできたり、闖入してくる。あたりまえの人との接しかたなどてんから無視しているのだ。ところがエジクはちがう。彼は気がねしながらドアから入ってきたし、しかも入る前にはちゃんとノックだってしたのだ。ただこっちが返事をする間がなかっただけのことだ。

彼は近づいてきて、挨拶をしてから訊ねた。

「いまでもまだ〈ブラック・ボックス〉は要るんだろ?」

「〈ボックス〉?」クレームを書く手を休めずに、うわのそらで訊きかえした。「なんの話だ?……

ボックスって、なんのことだ？」
「どうやらお邪魔らしいね」礼儀正しいエジクが慎重にいった。「だったらあやまるよ。しかし、部長にいわれてきたんだ……実は、あと一時間ばかりすると、十三階の境階を越える最新式エレベーターの処女運転がおこなわれるから、ぼくたちにどうだといってきたんだよ」
ぼくの脳味噌は依然としてクレームの言い回しの有毒ガスにすっぽりとつつまれていて、心ここにあらずだった。
「今年はまだ十三階へ荷を運ばなくてはならないようなエレベーターがあったっけ……」
だがそのとき、エジクが伝えた最初の数ビットの情報がやっと灰色の物質にまでとどいた。ぼくはペンをおいて、おい、もういっぺん言ってくれ、と頼んだ。エジクは辛抱強く同じことをもう一度繰りかえす。
「それはたしかなんだな？」念を押すぼくの声はうわずっていた。
「まちがいないよ」とエジク。
「よし行こう」ぼくは机から申請書のコピーを綴じこんだファイルを取りだした。
「どこへ？」エジクが訊ねた。
「どこへ、だって？　それはどういう意味だ？　七十六階にきまっているだろが！」
「おいそれとそう簡単にはいかないよ」エジクが首をふっていった。「まず、部長のところへ寄らなくちゃ」
「なんのために？」
「そういわれてきたんだ。その七十六階のことで話があるそうだ。別れの挨拶をしたいんだろ、き

っと」

ぼくは肩をすくめただけで、言い争うのはやめておいた。上着に腕を通すと、ファイルから〈ブラック・ボックス〉の申請書を抜き取った。そして、ぼくたちはエジクの上司である〈線形幸福部〉のフョードル・シメオーノヴィチ・キヴリン部長のところへでかけた。二階へ通じる踊場までくると、エレベーターの前がいつになく活気にあふれていた。外側の格子のドアは――そして、内側のケージの扉もそうだったが――開き放しになっていた。おまけに、おびただしい数の電灯が煌煌とともり、鏡がきらきら輝き、ワニスをかけた壁面が鈍い光りを反射している。《祭日までにエレベーターを引き渡そう》と書いた、とっくに色褪せてしまっている、古びた横断幕の下に、乗りたくてうずうずしている物好きな群衆が詰めかけていた。全員が神妙に、モデスト・マトヴェーエヴィチ・カムノエードフ総務部次長の話に耳を傾けている。彼はソローヴェッ市ボイラー管理局の技師たちを前にして演説をぶちあげているのだ。

「……そういうことは断じてやめるべきだ」彼は熱弁をふるっていた。「これはエレベーターだ。分光器や顕微鏡とはわけがちがう。エレベーターとは強力な移動手段である。それが第一点。それと同時に、輸送手段でもある。エレベーターはダンプカーのようなものでなくてはならない。ようするに、目的地までいって、積荷をおろし、あるいは、その逆をやるための手段である。これがまず第一の目的だ。行政当局は以前から承知していることであるが、学者諸君の中には――その中にはアカデミー会員も含まれている――エレベーターの操作能力に欠けているものが多い。われわれは現在、そのような状態に終止符を打つべく闘っている。過去の業績のいかんを問わず、エレベーターの運転免許証をとるために、全員に試験を実施し、優れたエレベーター学者の称号を制定する、

等々の措置をこうじることにする。これが第二点だ。

さて、次は技術者の同志諸君についてだが、彼らには安定した運行を保証してもらはなくてはならない。諸君にはわかっていることと思うから、客観的状況を引き合いにだすまでもないと思う。われわれはスローガンを掲げている。《万人のためにエレベーターを！》というやつだ。だれであろうと、すべてのものに、という意味だ。まったく訓練をうけていないアカデミー会員の書斎であろうと、一度でぴったりと行き着けなくてはならない」

エジクとぼくは人垣をかきわけて先へ進んだ。その臨時集会の真面目くさった空気は非常に印象的だった。これでやっと、今日からエレベーターが実際に稼働しはじめ、たぶん昼夜兼行で運行されるようになるだろう。それは重要なことだ。これまでエレベーターが、この研究所とモデスト・マトヴェーエヴィチ個人のアキレス腱になっていたのだ。だからといって、エレベーターに際だったところがあるわけではない。ごくありきたりのエレベーターで、長所もあれば短所もある。まともなエレベーターであれば当然のことだが、このエレベーターもごたぶんにもれず、ことあれば、階と階のあいだで停止してやろうと絶えず隙を狙っていたし、いつも満員だった。中の電灯はいつも切れっぱなしになっていたし、ドアは用心深く慎重に扱わなくてはならなかった。乗るには乗ったものの、いつ、どこで降りられるものやら自信をもって断言できるものはだれもいない。それでもこのエレベーターには一つ特徴があった。つまり十二階止まりで、それ以上うえの階へは昇れなかったのだ。研究所の歴史をひもといてみると、この強情なメカニズムを巧みな操作と足蹴であやつって、夢のような高さにまで到達した手練（てだれ）のものがいなかったわけではない。ところが、一般人にとって、十二階から上の果てしなく巨大な研究所の空間は、まったくの空白地帯のままであった。

こちらの世界とほとんど完全に切り離されていて、行政上の影響をうけていないその階域（テリトリー）については、ありとあらゆる、おまけにしばしば矛盾した噂が流れていた。例えば、百二十四階には出口があり、そこから別の物理的特性をもった空間へつながっているとか、二百十三階には、神秘的な練金術師たちの種族が、つまり啓明なインドのアショカ王が創立した有名な〈九人同盟〉の精神的後継者たちが住みついているとか、千十七階には、いまでも翁（おきな）と媼（おうな）が〈黄金のサカナ〉の金の稚魚といっしょに〈青い海〉の浜辺で楽しく暮らしているといったような話がまことしやかに信じられていたのだ。

ぼく個人としては――それはエジクも同じだが――七十六階にいちばん興味があった。資産目録によると、計算センターにとって欠かせない理想的な〈ブラック・ボックス〉がそこには保存されているし、〈線形幸福部〉が前々からしきりに欲しがっている〈お喋り南京虫〉とやらが住んでいるはずだった。われわれが知るかぎりでは自然と社会の欠陥現象がしまいこんである倉庫があるのも七十六階だった。だから、たいていの同僚たちは、そこへもぐりこんで、その宝庫を堪能するまで掘りかえしてみたいと思っているのだ。例えば、フョードル・シメオーノヴィチは、あたかもそこに〈楽天主義のための顆粒状の土壌〉が何ヘクタールも広がっているかのような幻想をいだいていた。〈社会気象部〉の若い連中は、せめて一人でもいいから資格のある〈冷えきった靴屋〉をぜひとも手に入れたがっていた。資産表には三人いることになっていたし、彼らは三人とも絶対零度に近い効果的な体温をしているからだ。〈生命の意味部〉の部長で、摩訶不思議学博士の肩書をもっているクリストーバル・ホゼーヴィチ・フンタは、七十六階でいわゆる〈翼のない現世の夢〉とよばれている珍種を一匹捕まえて、それで剥製を作りたがっていた。彼はここ四半世紀のあいだに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com